

## 宇治十帖の楽土

辻 憲男（文学部教授）

初瀬詣での途次、孝標女（たかすえのむすめ）は宇治に中宿りした。“源氏物語の作者は、いったいどんな所だというので姫君たちを宇治に住ませたのだろう”と興味があった。川渡りして宇治殿邸に入ると、なるほど浮舟はこんな所にいたのかと思われた。…あれは少女のあさはかな夢想だった。結婚に幻滅した。「光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは。薫大将の宇治に隠し据ゑたまふべきもなき世なり。あな物狂ほし」。それでも今、物語の一節がなつかしく思い合わされた（更級日記）。

浮舟は長編最後のヒロイン。母に従って東国に下り、父宮からも認知されなかった。宇治十帖の始め「橋姫」に、大君（おおいぎみ）と中君（なかのきみ）の姉妹が月見の合奏をする場面がある。それを薫が垣間見した。薫は大君に求愛するが、拒まれて死なれてしまう。次いで中君に近づくが、あやにくに行き違った。そこで「宿木」に至って、大君の形代（かたしろ＝身代わり）として浮舟が登場する。異母妹がいたとは読者は知らされていなかった。この幼く世慣れぬ女性は、誠実な薫にすまないと思いつつ、色好みの匂宮（におうみや）に心を奪われていく。思い悩んで霊（もの）に憑かれ、宇治川に身を投げようとして横川の聖に助けられた。

自己愛に殉じた大君は、『狭き門』のアリサに似ている。俗縁を断った浮舟は信仰の道に入った。後年の孝標女もまた阿弥陀来迎の夢を頼んだ。



対岸、平等院。末法の世に入る1052年に頼通邸を寺とした。  
浮舟とは、匂宮との愛に揺れ動く舟。